

令和2年度 第1回学都松本子ども読書活動推進委員会 議事録

日時：令和2年8月21日（金）13：00～14：30

場所：松本市中央図書館 第1視聴覚室

【出席者】

豊嶋委員長、上條副委員長、三ツ井委員、小林委員、上條委員、赤津委員、越高委員  
（事務局）瀧澤中央図書館長、町田館長補佐、百瀬主査、大澤主事

【議事録】

- 1 開会
- 2 館長あいさつ
- 3 委員長あいさつ

4 議題

【報告事項1 松本市読書案内人、子ども読書推進サポーター運用方針について】

事務局：説明

委員長：運用方針の費用弁償のみ、市の基準による改訂とのこと。

《改訂について承認》

【報告事項2 学都松本子ども読書活動推進事業の今後の進め方】

事務局：説明

A 委員：前回も言ったが、小学校の時の読書習慣が一番大事だと思っている。サードブックを1年生の学級文庫に置く場合、2年生に進級する際、どうするのか。最後に好きな本を選んでもらうのか、あるいは、1年生の学級文庫が増えていくのか。好きな本を選んでもらうとすると、人気のある本とない本がありうるので、簡単なことではない。また、必ずしも1年生でなくても良いのではないか。

事務局：サードブックは消耗品としての予算立てであり、備品ではない。同じものを毎年贈るのではなく、例えば汚れや破れた本は入れ替えていくやり方もあると思っている。あくまで学級文庫の中で見てもらい、1人1冊ずつ持ち帰ることは考えていない。現在35種類を想定しているが、種類を少なくして、同じ本を数冊用意する方法もある。

委員長：資料には学級文庫は1年生のクラスに常設固定し、次年度以降は学校と連携し、傷みの激しい資料の入れ替えを行うという記載があるが、例えば人気のある本

については複本を増やす、新しい本の中で良いものを入れるといったことも含めて検討するということが良いか。

毎年1年生の教室には、新しいものかどうかは別として、同じ形のものが続いていく。1年目は当然30～40冊置くが、それ以降どのように入れ替えていくかはこれから調整する。

A 委員：1年生向けの35冊を選ぶのも、消耗が激しいものを見極めるのも大変ではないか。毎年新しいものを置くわけではなく、補充していくのであれば、1年生である必要もないと思う。

委員長：サードブックは就学时ということが、計画の段階で決定している。市や庁内にも諮られていることで、皆にも承知してほしい。

B 委員：是非とも本を手にとってもらって、読んでいただきたいということが、最初のブックスタートの理念にあったと思うが、本の傷みや人気など、クラス単位で考えて本を選定すると、すべての子どもたちに最低でも1冊の本を手渡すというところがおろそかになってしまうのではないか。

委員長：B委員のような意見があってもいい。ただ、十分議論された上で図書館の事務局からこのような提案がされていると思うので、館長に少し補足をお願いしたい。

館長：まず、どういう機会であれば公平に渡すことができるか。保育園・幼稚園の卒園時、学校に入ってから。学校図書館を使っていくこれからの子どもたちのためにということを見ると、学校に入ったときの方が良いのではないか。ただ学級文庫があまりにも貧しいということを学校司書からも聞いている。学校図書館は入った段階で使えないわけではないが、秋ごろまで借りた本を持ち帰ることはできない学校が多い。

セカンドブックで12種類から選べるようにしているが、子ども、市民の好みは多様であって、こちらはこの本が良いと思っても多少違うことがある。子どもたちの幅広い好みをカバーできる本を考えていかなければならない。図書館が、子ども読書推進委員の皆さん、それから読書案内人の皆さんと、ぜひ読んで欲しい優れた35冊を選び渡したい。

1年経った後、どうするのかという点は確かに考えていかなければいけない。35から40人の学級で、200日くらい毎日本が読まれてどのような状態になるかわからない。松本市の図書館では大体200回貸して入れ替えしている。1人2週間なので、2週間のスパンで200回、約10年で除籍になっている。ブックコートフィルムがかかっているので保つことができるということもある。

学校司書が学級に行って、担任の先生にどの本が人気でボロボロになったということを年度末に間に合うように調べてもらい、選ばれた35～40冊は常に見てもらえるような状態で次の年もスタートさせる。本が手に入らなくなることあ

るので、途中見直しもしながら、3年から5年くらいのスパンで置く。学校図書館が使えるようになるまでのステップにもなるし、そこで本が好きになった子が、秋以降にいっぱい図書館に行って読めるようになるのではないか。また、今以上に司書が学校司書と情報交換もできるのではないか。4月の入学式の直後から、自分たちの教室に本があって、手に取って一緒に読んだり、ボランティアの方がそこに行って気軽に読んであげることできる。

C 委員：現場はありがたいと思う。ただ、人気のある本が先に選ばれ、読んで欲しい本は残る。前に1年生が団体の本を借りたとき、簡単に読み終わってしまったため、クラス間で交換していた。1クラス40冊とすると、2、3クラスあれば学校の中で合わせれば100冊ぐらいになる。サードブックも学校に3セット約100冊置き、途中でクラス間で入れ替えるという案もある。本当にたくさんないと、1年生用の本は、大体1冊すぐに読み終わってしまうと考えてほしい。

D 委員：学級文庫という形で読ませてもらえるのは、基本的には良い案だと思うが、教室をイメージしたときに、他にも図書館から下りてきた本がある。サードブックは別箱に返すということにしないと、1年経って、修理の必要な本があるか聞かれたときに先生の手作業が少し余分になる。

C 委員の言ったように、子どもは読むのが早いので、3か月たったら別のセットに入れ替えると良いと思う。

子どもが好きな本とか、人気のある本が、小さいときにそんなに大事だとは思わない。いろんなジャンルの本があって良い。見たことないものを見る中から図書館へ広がっていくというのが良いのではないか。

事務局：サードブックの中に読みものを入れるのはどうか。

C 委員：子どものレベルもそれぞれ違う。絵本しかまだ読めない子もいれば、もっと読める子もいる。1冊の予算が中央図書館の平均単価で1800円であれば、図鑑や知識の本も選ぶことができる。1年目から図書館を利用してください、2年目以降は使い倒してくださいという気持ちでサードブックの本を考えていく必要がある。

E 委員：学校の様子は様々。例えば本の買い替えをして1年生をきれいな本で迎えたいという学校もあれば、予算がないところは本がボロボロというところもある。

セカンドブックですら大変なのに、サードブックはさらに多くの本の中から選ばなければならないのでとても難しい。子どもたちに何でもいいからたくさん渡すのか、それともこの体制で子どもたちを迎えたいという気持ちで渡すのかで選書の基準も変わると思う。

2つの事例を挙げたい。1つは、誕生日に本を送るという村がある。校長先生の発案で始まった取り組みだが、1学年5冊ずつのリストから選んでもらい、小学生から中学生まで計9冊もらえる。子どもたちは自分の好きな本がもらえて嬉

しい。しかも先生が「お誕生日おめでとう」と言って、本をプレゼントしてくれることはとても大事な出来事。

もう1つの事例として、サンタプロジェクトというものがある。クリスマスに、施設や病院の子どもたちに、一冊の本を選んで、誰もがサンタになってプレゼントできる。最初のころは感動的な出来事ばかりだったが、だんだん子どもたちも知恵がついて来て、高い本を選ぶようになってきたり、困った事例も出てきた。そのときに、施設の先生が人数分くださいと言って、これはみんなにもらったんだよと子どもたちに伝えたが、自分にもらったと思って喜んでいて子どもたちから、一人だけが読む本じゃないと引き離すは難しい。

図書館から提案されたやり方自体はとても良いと思うが、何がいけないか、何の問題が生じるかイメージを膨らませ、現場の人にしっかり意見を聞いて、スタートすることが大事ではないか。

F 委員：サードブックということで、小学校入学時に、本に接する機会をつくることは大変重要なことで、それをどのような形で子どもたちが手に取るかということを考えなければならない。

委員長：この学級文庫に置くスタイルのサードブックというのは、可能性を秘めていると感じた。他の自治体でも同様の取り組みを始めているということが、今回いくつか調べてみてわかった。話を聞いていて、保育園で本を借りられたのが、小学校に入ると9月まで借りられなくなるという状況が、まずは改善されるべきではないか。

そして、本を選べない子どもたちが、学校図書館に行く前に、学級文庫によって、今後選べるようになるという可能性も感じた。学校図書館の方がたくさん本があるので、そこに行っていきなり選び出せない。学級文庫であれば、見られる範囲の中で、絵本から読みもの、科学の本など、非常に多ジャンルの本に触れて選ぶことによって、興味のあるなし、あるいは個性や発達段階に関わらず、多くの本に触れることができる。自分はこういうものが好きだとか、知らなかったジャンルに出会ったりすることで、図書館で選ぶ力にもなるように思った。

もちろん、一人ひとりに本をプレゼントすることの良さが他方であるが、先ほどの意見のように、現場での課題や先生方の意見もある。そういったことを反映しながら進めていくということで、全体的には賛同する意見が多かったように感じる。皆から出た意見も、庁内での会議にぜひ有効に生かして進めてほしい。

### 【報告事項3 令和2年度 第1回作業部会の報告】

事務局：説明

委員長：ブックスタートの候補本・準候補本について、様々な場所でのアンケートの結果

を踏まえて、図書館児童室で選んだ。

過日 7月 16 日に、読書案内人として、この委員会の一部の委員も加わった形で、作業部会を行った。その結果、『がたんごとんがたんごとん』、『くだもの』、『じゃあじゃあびりびり』、『くっついた』、『まるてんいろてん』という 5 冊が選ばれた。2000 年以前のものから 3 冊、2000 年以降の新しいもの 2 冊を選ぶことが 1 月の作業部会で決まった。ボードブックが 5 冊のうち 2 冊入った。

『じゃあじゃあびりびり』を選んだ理由は、『いないいないばあ』と悩んだが、さわる絵本の用意ができるからである。値段的には高いが、こういうものの用意があるということを示すことが、すべての子どもにやさしいまち松本を表現することになる。この本の対象者については議論の余地があるようなので、年度内に詰めて、今回の改定が無事にスタートするよう期待する。何か特別に意見はあるか。

A 委員：作業部会の部員の名前を見るのは今回が初めて。どの委員が出席するか知らせてほしい。

事務局：作業部会については、松本子どもどくしょノート、中高生への働きかけ、1・2・3ブックの作業部会を開くということを昨年度第 1 回委員会でお話させていただいた。どのような方に作業部会に出席していただくかは特に決めていない。他市では固定の 1 人が専任で子ども読書関係をやっているところもあるが、松本市では、読書案内人という形で、いろんな専門の知識を持った民間の方をその都度呼んで話し合っている。

委員長：子どもの本や読書活動推進に関する専門知識を持った民間の方を、図書館の方で必要なおきにお呼びしてその都度来ていただいている。固定した部員がいるわけではないため、今後委員の皆様も、そのジャンルに応じてそれぞれの作業部会に参集される可能性がある。

《ブックスタートの選定について承認》

## 【協議事項1 子ども読書推進サポーターの承認について】

事務局：説明

委員長：子ども読書推進サポーターの設置については、前年度の推進委員会で承認されている。子ども読書推進サポーターとは、松本市読み聞かせボランティアに登録し、かつ経験を積んだ方である。2年間でボランティア養成講座、スキルアップ講座を受講し、初めて要件を満たすということとなり、昨年度初めて読み聞かせボランティア養成講座が開かれ、その後スキルアップ講座が4回開かれた。

昨年度の読み聞かせボランティア登録者は、読み聞かせボランティア講座を全部受講した方と、過去7年、松本市と協働して子どもの読書推進にあたってきたボランティアの方とした。その全登録者のうち、活動実績があり、かつスキルアップ講座4講座受講した方が、この5人ということ。

サポーターとボランティアの違いは、簡単に言えば、サポーターは有償で活動するという点が異なる。ブックスタート事業等の子ども読書活動推進のサポートに当たるという立場で、これまで図書館の職員2名体制で行っていたブックスタート事業の現場での作業を、職員1名とサポーターという形にするので、図書館の業務としては、確かにサポートとなり、民間の実践を重ねた人たちの人材を生かすということにも繋がる事業だと思う。

サポーターの実際の活動については、現在、このコロナ禍で健診、ブックスタート事業自体を縮小する形で行われているため、いつから稼働できるかは、今後の状況次第。今年度2回目の推進委員会で報告してほしい。

《子ども読書推進サポーターについて承認》

## 【協議事項2 ボランティア養成講座・スキルアップ講座の開催について】

事務局：説明

委員長：今年度も6回、私が引き受ける形となったが、昨年度の委員会でも、ボランティア養成講座を1人で担う必要性など、様々な意見が出た。昨年度のことを思い起こすと、1人であったがゆえに、皆のモチベーションが保てたので良かったという意見がある一方、様々な人に講師として触れた方が良いのではないかという意見や、そもそも委員長を拝命している私が6回やることについての是非の意見もあった。また、ボランティア養成講座は、図書館の職員がやれるようにしていくべきではないかという、貴重な意見もあった。

そこに向けて、図書館と協議した結果、来年度以降、全6回のうち、基本とおはなし会のプログラムやグループワーク発表については、図書館の職員が担うような仕組みを整える準備として、昨年度と同様に私にお願いしたいという話があったため、私が務めることとなった。あそびうた・わらべうた・おはなし会の

小道具や様々なおはなしの手法については、今後どなたにお願いしても良いという形としたい。

スキルアップ講座については、現在講師を検討折衝中ということで、きちんと整った段階で報告があると思う。令和2年11月中旬以降から令和3年2月までの間に計画すると聞いている。

読み聞かせボランティア養成講座の開催については、すでに開始する段階なので変更は難しいが、スキルアップ講座について、このような講座が良い、あるいは、こういった方も講師として良いのではないかとということも含めて、講座自体をどのように実施していくか、延期や中止等の判断をせざるをえない場面が出てくるかもしれないといったことについても、幅広く意見を伺いたい。

A 委員：まだ一般的になっていないが、コミュニティ・スクールという制度がある。とっかかりとして多く取り組まれているのが、コミュニティ・スクールの中でも読み聞かせ部分。小学校のボランティアとしての読み聞かせは1年生もあれば、6年生もあり、6年生ともなるとかなりの本を読むので、読む本に気をつけなければいけない。小・中学校対象の講師の選定には、力を入れてほしい。

また、学校で地道に活動してきたお母さんたちにも声をかけるように、学校やコミュニティ・スクール関係者にも話してほしい。

委員長：スキルアップ講座は、決してボランティア、図書館ボランティアのためだけにあるのではなく、読み聞かせや子どもの読書活動に興味のある方ならだれでも受講できる。確かに、私自身も20年近く学校で読み聞かせしているが、地道に地域の学校で、読み続けている先輩の方々も大勢いる。そういった方にも、情報がわかりやすく届くような手立てが今後必要だと思う。

E 委員：公共図書館のやる講座なので、公共図書館員との関りを密にして、分館の職員も含めて、同じような気持ちで講座をやっていくのが大事ではないかと思う。去年1年やってみて、良い悪いがいろいろ出てきた。読み聞かせボランティア講座もスキルアップ講座も、図書館全体一体となって、みんなと一緒にスキルアップしていくということを目指してほしい。会議の場で、同じことを短くしてでもいいので、全員の意見を聞けるような研修ができれば良いと思う。

委員長：これまでも課題だと認識してきたことだと思っている。この委員会が始まる1年前、一昨年度、図書館講座を試行的にやったが、全6回を他の講師も含め、ぜひいずれか一つでいいので、職員にも出てほしいという話をして実現した。こういった仕組みが1年ですぐ変わることはないが、共通の思いを持って、図書館運営に当たることが大事で、そういう思いこそが図書館をより良くしていくことにつながると思う。どうしても映像では思いが伝わりにくいところがあるので、コロナが収束したら図書館職員が同じ研修を受けるような機会が持てたら良いと思う。

最後に、今後の子ども読書活動推進の方向について確認して終わりたい。

ブックスタートは平成13年から始まり、この度承認された5冊に来年度から更新される。セカンドブックの配布は、第2次計画スタート初年度である昨年度始まった。サードブックについては、現在準備中で、本日活発な議論、意見が出たので、庁内等でも調整し、令和4年度開始予定。

作業部会で、ブックスタートの時に配布している「こんにちはえほん」についても、もう少し良いものにしてはどうかという意見があった。例えば、ブックスタートの絵本はテーマの一番最初に来ていないものがあるので、テーマの最初に持ってきた方が良い。そもそもテーマ自体はこれで、この順番で良いのかというような意見が出た。皆からも意見を出してほしい。次に控えている「子どもどくしょノート」がブックスタートとセカンドブックを総括したような形の冊子ノートになると思うので、「こんにちはえほん」の更新も大事なことだと感じている。

その他中高生向けの働きかけ、図書館デビューの応援等についてはすでに図書館内で準備が始まっていると聞いている。

人材育成等についても、子ども読書推進サポーターが今年度稼働できるかというところまで来ているので、一歩ずつできることを着実に進んでいると感じた。

以上